繪本豐臣勲功記

九編

三

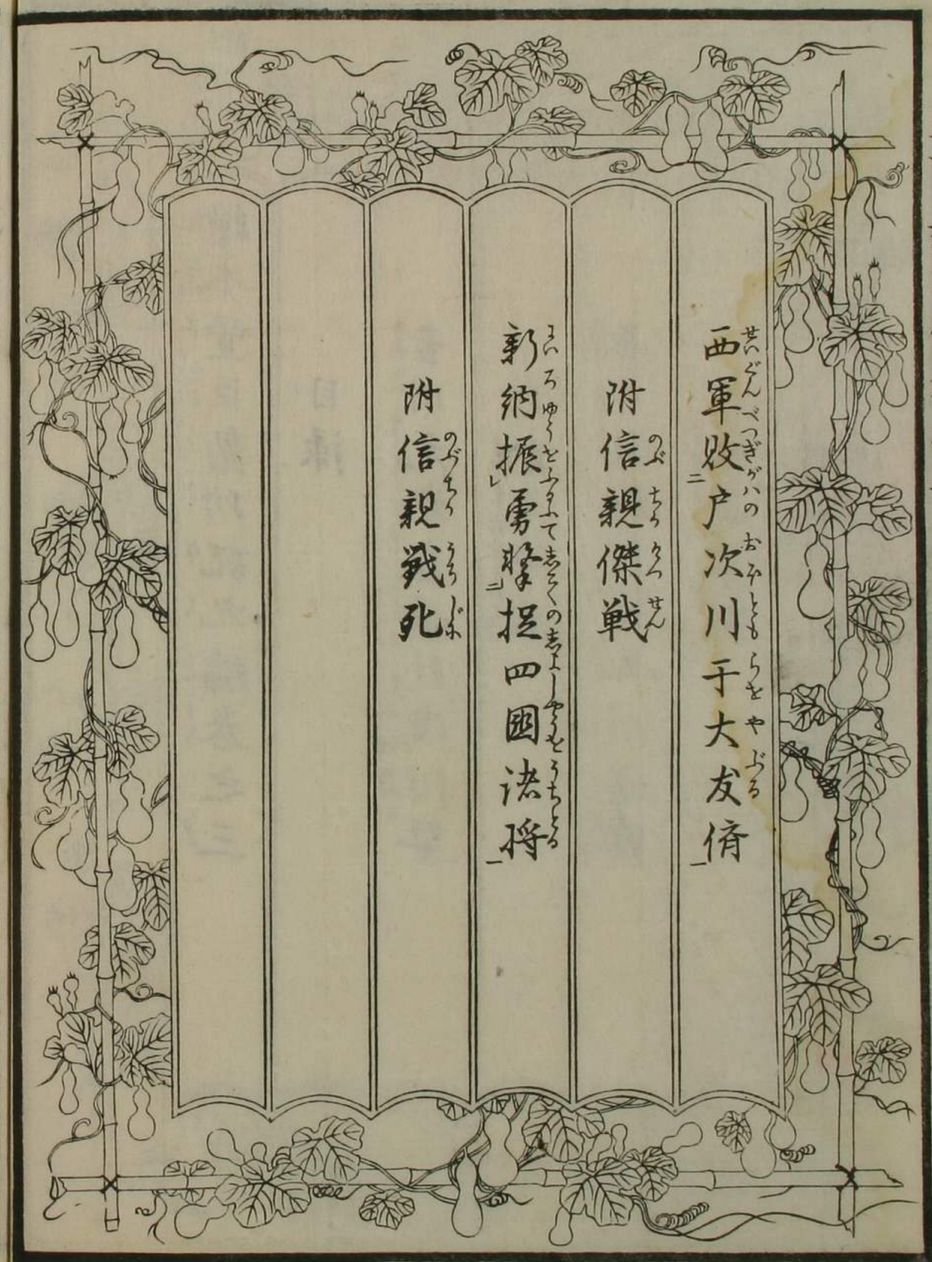
へ函3号
2209
83

門へ遠13
2209
89

繪本豐臣勲功記九編卷之三

目録

吉川元春産漢敗鴻津勢
附忽平共茶
長芳我郡父子九州進發
附利之落城



日金

名所図会

豊臣記九編巻之三

櫻澤堂山　刪補

備本豊臣勲功記九編巻之三

吉川元春座禅欲二嶋津勢一屬　忽平巻第

天子の旌旗一半を分つ。八方の風雨中及ふ奮ちるの時をでふ熟ヤんと欲するあるふ羅ア。の鴻沛ふ疆ふーて。駐日内府の使者を遥返ーしりーろべ。秀吉定で瞑と発ー。ミづ〳〵発向をべららんと。沛沛修理太夫義久秀吉ト向セざ〳〵ん先ふ。巻筋と斬取り。西海と平治ふさんと。沛沛図書頭忠長。伊集院太郎つ太支忠棟ハ万余騎の名士と與え。天正十四年七月十三日統弟の國へ推出ー。岩谷の城ふ攻蒐り。九日だるりゞ際と攻てついふ大將

紹運と自殺ゐさしめ。そ也より直地ゐ立花宗茂ゞ對凝守。統後國柳川の城ゐ推進さり。是より已前。古道將監艦連。立花艦連ハ宗茂の養父ゐり 筑津勢岩谷を攻るの時境。組馬ともて内府へ御加勢と乞さてまつ。這胸内府ゐハ仙石ゞ。言狀しりると聆しめさ也。筑津を攻んとおゞしゐ也ども。此歳のうちハ御自身ゐ。出馬しまふこと有りゞさく。お也ふ同て毛利家へ。九州退治の先陣と。命屬ら也る時ゐ也べ。今立花ゞ注伸ときくと等しく。お也と救ハしめんと懐しめさ也。黒田孝高と同代として。中國へ當向さまふ同年八月初澣の頃黒田勘解由次官孝高。中國へ下向セしゞ。同十一日藝州廣津ゐ居し。毛利輝元ゐ對面セら也。立花加勢の趣と演るゐぞ。吉川小早川へも達セられ。軍議評定ゐ逗む也りる。吉川元春。一計議と工夫セ居也薩州勢と退らセ。然して后ゐ軍勢を右づらゐ出して。まづ巻茶の國と平均ゐし。次第ゐ伐ハ筑津勢。いらゐど強しといふとい〳〵ども。お也と制する事あさむぞ。本國までも退くべし。然ゐくして今軍馬と発さるものゐらハ。巻統の間の城くゐハ。筑津へ降りし倫多し。渠俗ゞ佑而ゐて拒ミゐハ。攻逼んゐも同取らん。甚とおざむらんゐハ。漸く如くの計議と施し。故の心と拔んとゐつも。いらぶゐやと聆て孝高。筑ゐ現ゐ奇ある謀計あり。先逃らゐ行ゐりんと。敎通の書翰と紀写させ。意利ゐる狀卒

と擢出謀策を言謀め。柳河の城を敵として。鴻津勢ゞ徘徊しける。方へ向てぞ出しける。這晌鴻津の五万余騎い。柳河の城を百重ふ捉捲。獅象虎の威と震ふて。息も次セぞ攻るといへども。城主立花左近将監智勇ふ長さる大将ふして。おゝを補助ふを門〻ふへ。立花三左衛門。綿貫嵜名清十時但馬守。同侍右清つ。小型和泉守。白井彩十郎俵。陳孫もあらセぞ防戦しける色べ。ふりく。臨る化色いふくて。進方い狭率と損ふのゝあり。おゝふよつて鴻津勢も。攻侵んぞるそのふりふも。伊集院忠棟い軍慈ふかしおき勇将ふゝび。五万余人の軍勢と。五千余騎づゝ十隊ふ組結岩といふ術とをもて。列火のごとく接起るを

べ了得ふ強き立花勢も。十方と防ぐふ術つきて。ついふ外繞堞堡を乗破らゝ城名今いりふゝ。乙丸へ寄んぞる。忠棟忠長烈しく指揮ふし。此図を脱りぞ速りふ。乙丸とも攻揀べしと声嘆るまで自軍を懲まし。電霰のおとき名院と。吳とも。ふさぞ先蒐の。自方の名と揃ふふし。死鬼とのりあえ跳戦。ふん。ふくて乙丸と攻破り。喊くおえして乱投る。いゐい這城甲丸ぞりとあり。こゝぞ絶体絶命あり。破らゝていゝ生べき道ふし。いのちぎり根限ふ。防禦セぞんいあるべりぞと。火水のおとく。拒抗ぞり。もつとも此い堅の丸といふ要崖ふして。険岩四面の路ふ羅列を。粉氏上え大木大石と輾しける色え。容易ふ

島津図書誤て吉川元春ゞ謀書を奪て退軍

攻陥るまとを得ぞ。皆て防禦ハ虚陳なりをバ。七月九八日より八月九三日まで。方術とかをて攻るとい〳〵ども。更ふ淪る化色ふし。彰てハ進名も堪るまゞとて。暫く休息セさせつる。大将治ハ図書既熟く思慮とめぐらをふ城名ゝづゝの野ともつて。陷る牢城心得ぐさし。決も陷べき城ふをバ。降る狡ふハ撃出るゝ。遠ふふをべきと。他まで防守るふとい後逼とまつと覚へゝり。俺們欲地え彰の如く深くと入朱るも。降条の者あゝがもえゝり。然ども人情波瀾の像く。反震るふと虚吸の際あり。彰て情と為りがさし。尤右のうちふ秀右より。後陥の大軍いゝりふバ。降りし族も後心ちんことものあゝん。然ある

胸い疑惑ふ及ぶん。いゝがふさんと思意ふる時境。彼軍侍ハ人情ふ人情ふとおがしき性しき名と。一両人御りて図書ふ前ふ繁出。首卒若て稟しゝるゆう。這名自方の陣前と。徘徊セしめいもえ。捉て拷使いあゝと聆て治ハ図書頭。彼軍ふ命じて紀さしむをバ。一封の書と情潜持ゝり。弔地ふ奪ふて用閲をバ。思田孝言密書をもつて。城中え絡をる紀綱い。内府殿の御加勢。遅くその地へ向セセふ。それより先ふ吾侍ゞ軍勢又万余猶ふて。今月十六日ふ中国の地と出馬しぬをバ。陸ふ堅固ふ牢城をべしと稟送をる書簡あり。図書閲除て大ふおどろき然ぞおそ察ける如く。中国の大軍尚国え

推進るものあらバ。我倫ハ敵中ゑ挿まるべし。危き合戦とせんよりハ。一旦紀後の地と退き。根と固ふして戰をんぞと。八月九日の曉天隊伍を次第ゑ退らせ。立花宗茂城中より。鴻池勢の退くと看て。甚をや進ぶの退去ハ敵陣ゑ変を生じ。此図を外臨さぞ退轍セよと。強ぶ勝撰て一ゑ奈落。怒潮の如く撃て出。後距ゑ備えさる。伊集院忠棟ゲ陣ゑ喰ふ。落ぶ歩卒の嫌ひなく。無二無三ゑ柵倒し斬捲ることおびまでの。鬱怒をゑ敵をんものと。猛威を振ふその中ゑも。立花三左衛門同治郎ぶ奈衆。十時伝右衛門ゑ鴻池勢も。大ゑ苑きて敗走しるるを鴻池図書ゲ隊の軍士倫。取て返して戰をんぞると。大将忠長ことと制して。單ゑ隊伍を固めさせ。統車の像く咲も苑きぶ。臀揃突せて退去しるびべ。立花勢も敵軍の。隊紙よきを大ゑ感じ。退留て帰城しるびべ。鴻池勢ハやをくと。肥後の矢代まで引退き。此地ゑ暫く陣を留めて。佐方の蹠蹊を試合在り。佐右立花宗茂ハ。直地ゑ宮多井の城ゑ推進セ。鴻池ゑ勁力セし。星野中務大輔。同民部女輔兄弟と警捉。右ぶ〳〵軍威を輝らし。おとらの青を大坂へ傳報し。中國へも聆へんとバ黒田とをどめ毛利家ゑも。佐右を媒介図ゑ齒とりと。雲拍て矣彈しる。甚后黒田勘解由孝高。小早川隆景。吉川元長それ〳〵軍

彼おごそかみ。藝衆と発足せらるを九衆歯て弛向ふ。其勢二万八千余騎。是十月の末なりしが。蛍くも巻帛み推渡る。軍威弘大なるみより。利光戦帛入道宗景。子み百余騎みて弛加をるべ。長堅こ帝方弟つ以秀も。黒田孝高みの降系をこ。こをみよりて中國勢ゆをく軍備律然として。同國香春へ推進より。城将宮橋九郎元種い。年早りをども遊撃の居。を猛勇の名士なるべ。巻も畏をぞ籠城をこみ。早川隆景。黒田み潭して。浩る殺所み向をんより。攻臨易き城より次取み破りて。然して后み香春の嶽を。接紀みバ易うんと存注なり。十一月七日より三日が間み。宮崎の城を攻臨し。十日みい障るが岳を秉破り。其翌日い香春の背山なる。二の峯三の峯を攻取て。おをより香春の城み推進。最も對痛く攻巻りるもえ。及ぶさる期と早くも窮して。宮橋の家臣軍主人元種を勧め。遂み降系を。こりしらバ。今い巻帛の國中み。故一人もあらぜして。八郡脊しく平定をこ

長号我郡父子九別進発　属　利光落城

能ど得て天衝み躍り雲漢み振翼し。光を虹魄み垂をて以て近署の多士を照をみ足をりとい孔融が補衡とをすむるの表みあん。何い弱もお歯りて品い種蠢士の微廻あるものみあるざりし。豊軍の幅槊より長篠三毛食偕み。能の像く表ひ魄の如く浚済。威風萬方み凛烈より。

茲ハ豊後の國中ハ先ヲて浦津の軍勢拡ハこゝを攻撃
るゝ也。元治和落城ハ迫びしゞ。這遭ハ豊後一國を悉く
斬遣ス。大友の根を新んぜと。三段（義鎮日向と云）の大軍を組
催し。三方ハ別ヲて進発ス。一方ハ義久をづゝら大將と
して。其勢壱万ハ余騎日向口より攻入らんと。恒見ハ
本陣を居らゝ。一方ハ浦津中務大丞泉久一万余騎
ハて豊後の國南部より襲て入る。一方ハ浦津兵庫頭義
弘（義久の嫡子）大將とし。浦津左馬つ佐後。同右馬頭弱久。同
図書頭忠長新納武蔵守忠元。川上上野介信久。同左京助
信種。格山兵部女婿親久。伊集院右衛つ太丈忠棟。同肥前
守久棟。同下野守棟長。同紀後守。伊勢孫九郎。白濱周防守。

を敵として其勢都合六万余騎。肥後口より乱入ス。ゝを
ハ怖ヲて入田賀来宮尾。浦ハを敵として。雲ゞ岳の浦ハ
正三年九の佐伯。竹田の城等十月の初より。中旬までハ
攻臨利光の城ハ攻落る。大友義統こゝを助力をといへ
ども。力迫むざりしを。組馬ともつて上方ハ逃らセ。内
府へ加勢を乞まいらゝを。秀吉公毛利家をして。ゝを救
ん。とをゝどる。這時吉川小早川侍従前の款ハ對戦し
ゝを。内府蒐び四國ある。長曾我部信親ハ命ぜらゝて。
豊後の発兵を救ん。とせ。然るハ仙石権兵衛秀久。先
達て浦津へ使者さりし時。義久ゞさめハ恥しめらゝを。憤
怒去方ふきまゝハ。内府へ願ふて。浦津の代隙ハ向ふん

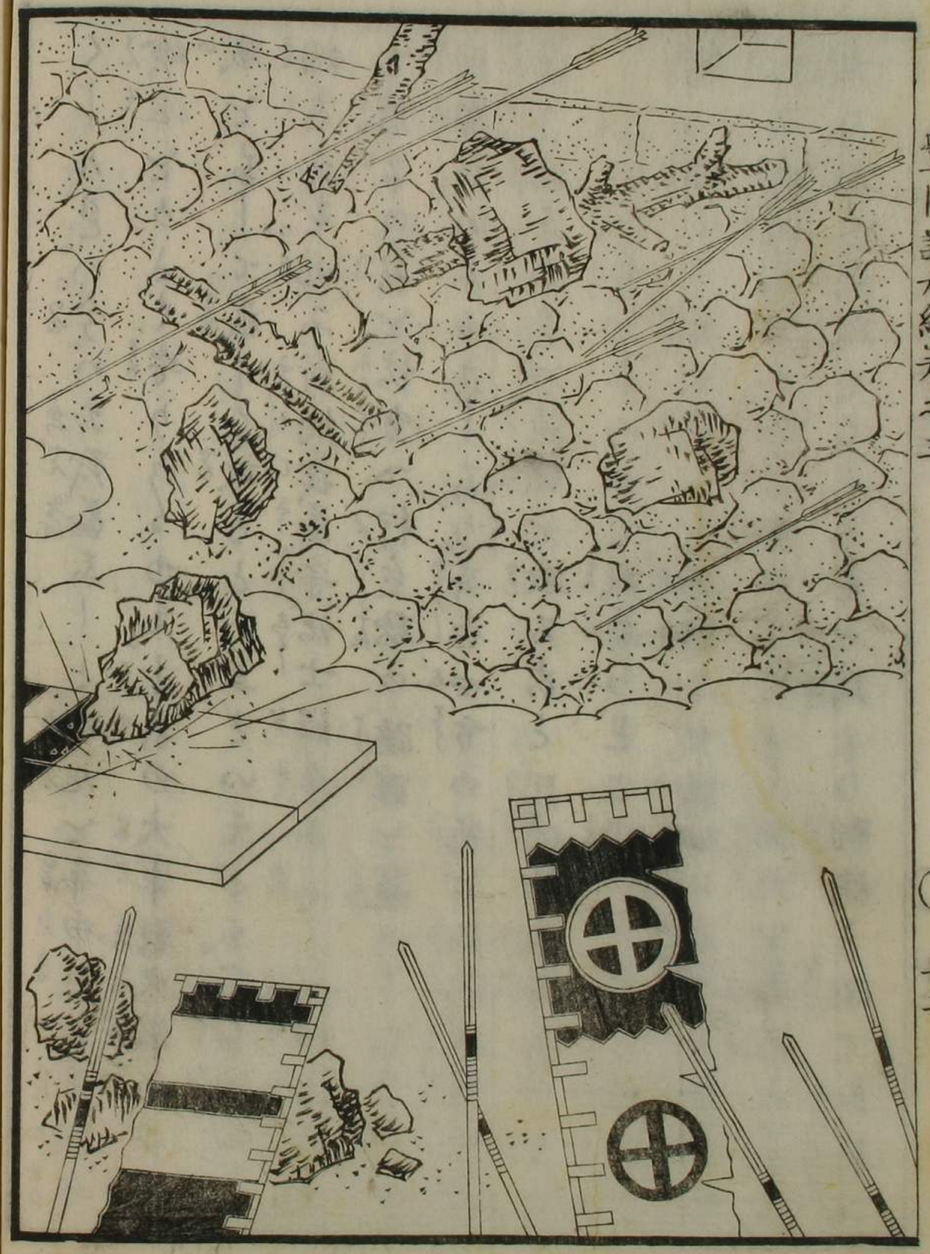
秀吉公こゝを許さゝ。国代に命ぜゝ。別て這般西征を
とも。決して疎忽の合戦なきやう。清後も命所らを忘船
方ふハ加爰左馬助右明脇坂中務康治八千余騎みて。海
上の警固みお副らる。嗚ふ長号我郎土佐守元親。内府え
言出らるゆゝい。這般る島弥三郎信親大将の任ふ命属
ら。九列加勢ふ向をしめ玉ふと。家の面目ふ思ふ
ふさぎ。然りといへども弱年の信親。大敵の将沖ふ対
戦んと。覚期ふくおそ存ぜるふを。元親も苦ふ絶向ひ。
助力あゝさき旨を弘ふ内府尚理と熟思さ。疾弟のお
とく命じ玉ふ。これふ因て長号我郎父子。仙石秀久三好
政安脩。二万余騎の軍勢みて。巻後を尚て下向しらるゞ。

十一月初の比日。巻の后羽柴秀吉みを呼。大友義統ふ対面
して。軍議の席を開らゝ。嗚ふ元親従来の将沖ゞ戦
相いらふやあると。仰れるふぞ。義統仔細ふおもと諸
り。彼も猛勢結くして利光と圍ミ。府内とまで攻抜んぞ
戦相ありと。聆て元親。おを怪らゝざる大敵ふをバ。謀計
と構へぞして。彼ふ対して戦ぞ。らゝゞ敵の端ふ向
ちん。一遍説ふと遁ぞんバ。あるべらゝぞといふと秀久
原来勇気ふ猛さらう。へ。恥しめらをる憾恨あをバ。ひ
とえふ戦ふことを望ゝ。元親の遠慮も然ることなゞ。
遥く此地ふ下向ふ。眼前の敵ふ自方を攻させ。元親ふ
ちる方やある。快く出戦こをあるべしと。怒るぞとくふ

言出るを。元親志づうみをを制止し。そをハ一図の了簡あり。從令數十の城郭を攻掠るとも。始終の勝を本意とを。剃やこをハ私の軍ゐあるゝぞ。天下辞禮万民安途のさめをべ。佐多遠寇と繞らをべしと。軍方ゐ熟さる土佐守吉理を。倪て城めりをどもこをを用ひぬ輩の。仙石秀久のミあるぞ。三好下野守正康も。加勢ゐ交るり在りるゞ。原来長宗我部元親といい。數年の故ゐて弾指セし身の。今羽内府の幕下ゐ属し。やむことを得ぞ面茅のミ。互ゐ和睦の相とゐセども。心中ハいまゞ怒恨敬らねバ。今元親ゞ吳見を拒ミ。その清解辞ハ理ありといへども。素芒吾倍ハ畜國の。加勢として来りつをバ。洗沐と合戦をるハ勿論自方の城の危ふくりしと。此郎ゐ迫んで救をぞんバ。苔び信義を賢ふして。牢城をる輩あるべらぞ。右左の論ハ云益ゐこそ。利光の城と救をぞんバ。忽地落城をべしといふゐ。義統もゐをを理として。畳邪ゐ業内ゐをべりをバ。各向をセゐふゆゝ。吾顧郎ふ所あり と。何斉しく言をゐぞ。元親る今ハ制しゞく。且ゐ自方の武士と見殺ゐをる理ゐ。畳邪ゐく此義ゐ佐ひりるゆえ。然らバ戸次川まで出張して。敵の疲蹟を見量らんと。総勢二万有余人。臼杵の城と進発しりる。這胸襟ナの大軍ハ。溢潮の沐を巻ゞ如く。巻後を追ゆ攻逼りるゆえ。甚威ゐ怖をて或ハ落城。或ハ降参しりるゆどゐ。東南

今は利光の城のみ獨立したりる。鴻津の先陣新納武蔵守。伊集院右衛門太夫倅兵庫義弘同中務と一隊なり。利光の城と十重廿重に捕綱ること雲霞の像く。百姓を別さて攻起りるなぞ。城兵勢の微なるに因て。交代るべき兵もなりもバ。遂に外繞堡を乗破らもし。乙の丸にして防戦さること。十月九日より晦日まで。いろに攻もど破り得ず中務太輔家久思案して。法軍と共に退ぞらしめ。攻伯さる態に寄蒐。夜に入ぬもバ燈をも火光昏眩セるなぞ。城將利光就為入遂宗信こそ欲は退屈して欲の守衛も怠る体あり。夜毆と蒐て逐搦らんと。百余人の強士と撰出し。十一月廿日の夜まひそうに乙丸を撃て出。伊集院忠棟が陣へ突投る。鴻津勢は狼狽さいぎ。中陣の方へ放走を。利光入遂勝に乗じて。中務と撃捉んと。直地に中陣へ猛入りるに。此に敵兵一個も寄えず。入遂宗信と〻して。佐こそ欲に謀らもし。退返さんとも る際もあるセず。右の方より種子大膳。左より伊集院右衛門太夫正斟に進んで斬て出る。おもに絶て二子有余の騎馬の兵長棟の後の尖頭と連並暮地に棚て出。一個も剰さず殺戮せんと。縦横云に撥居る由え。入遂今は逃もぬ所と。百余人と円に彼元右に薙紀左に跑紀。死憤を発して戦ひりもどる。敵を自方に法もバ。百虎の中の一羊さり。こもに入て城兵は。委く戦死して

主従ニづゝ十六七騎ばかりうち減まさるに辛くも入道は一騎。胴又を脱て歩立ゐあり。乙丸へ逃投んと。門へ走ゐとゐふゐへども。嚴しく進ゐ斷裁れさるべ。蝶と越んとするところを。種鴻大膳叉くも視ゐ例の小筒の雷流ゐて。因ミゐ云小筒の鉄炮と種ゞしゐとゐ云ゞさし鉄炮ハ元来種ゞしゐゐ初て流りしものゐるべゐ小筒のハ銃ゐり。みゐづく尤勝ゐ弛ゐふゞ。嵐と故てべ銃さゞ入道宗案ゞ尤の股へ撃込ゞり。驀進ゐ墜さと斉しく大膳叉明走蒐て晩くも首を掻所より。依ゐ城中ゐ引るゐハ。入道ゞ夜撃の軍敗ゐて。欲のさめゐ悩まさゝと助けんとをといへども。進ゐ城門ゐ遮へさるべ。救ゐゐ術ゐく踟躕ひまゐ。をやゐ百余の入道主従をゐ戦死を做つくしゐるべ。今ハ出戦益ゐしと乙丸と弁甲丸ゐ退凝ゐ検泡とりさく守りゐるもえ。進岳の大軍烈火激水の憤威とゐして。嚴しく攻るといふといえども。容易陷べふ相来えゞ。時ゐ新納武蔵守。依士群卒ゐ示して曰。君先遠て悄子の名と。依方へ行走欲の蹄蹊と窺へしるふ。中国勢ハいふもさゝゐり。秀吉四方の名と紅起大軍の後逼下向をゐるべ。這城と攻るゐと尻時も粧稼ゐりゞゐし。先や各勇をきへめて。攻着ゐらるゐよ快つゞゐと。城の八隅八角より。面も觸らゞ捧起させ。新納ハ九州ゐ絶倫岳双の猛将ゐるべ。城名微ゐしてゝく拒抗を。烈甚として大ゐ怒り。踏破てくるんぞと。馬より飄流と跳て御。先ゐ



新納武蔵の守軍進
怪勇防石を跂反し
遂ふ利光の甲丸と蹈破る

突セー大揖板の末頭搶緝て城中より。抱卸を大石と。最
ろろくと蠟揚こく。唯一個ヲて猛戦ーろを。城名古
屋ヲ攻囲ますを。碎易しうると先乗投と。爆竹の如く拵
揮ーろを。生死知らざるの薩戸勢。諜ヲ捉名跳越砦ども
樹ども吳ともセず。難ふく一方を乗破り。魔風のおとく
乱入ーろを。城名今い拒抗ヲ術なく。我も〳〵と斬て
いで。おもひ〳〵ヲ戦死ーて逃ヲ落城ヲ迫びろ。西軍
大ヲ凱歌を発。城中ヲ入て息をやすめ。佐幸の疲労を補
ふセろ。這時大友義統ハ長名我勢。仙石侑と利光の
城を救ちんとめ。戸次川の遠方まで出張ーろが。翌日
ハ十一月十日なるもえ。昨日利光落城セーより。聆えろ

るヲぞ。元祝とをじめ。佐将大ヲ力を減を。おをヲよつて
土佐守若び佐将を率めろるゆう。況ヲ利光落城とおを
バ。出戦をるとも利なろるべー。快退ひて臼杵府内を守
るを上策なりんと。稟を三好正康うち消ー。繁べき
故の既已ヲ。河の面糸ヲ充満ろ。俺们既まで出軍ヲー。
利光落城を聆て。それヲ猿き退返をハ。言甲斐もなき
而佐なりと。稟をヲ河内襲て。仙石権名清秀久も。素より
合戦を好をぬをバ。いろさま故の勝藩り。今日義ヲ横行
をるを。一戦ヲも迫ぢーて退ぞろんこと。猿ヲ故名を
怖るヲ。ヲ似て最恥感ふおもふあり。故の進退強弱とも
試んさめををバ。是非ヲ一戦をべーといふ。元祝強て

止めがさく。然べ孫伏を餞をべーと。素内者ゝる大友を正斜ゝ立させ。仙石をもて右ゝ斜仙ー。三好と尤ゝ先隊ゝさーめ長号戒弟信祝ゝ二陣を行せ。元親ハ後陣ゝ彼えて結くゝと。戸次川ゝ近きぬ。這胸三好仙石ゝ名士侍ハ。ゝもまで数く元親ゝ。練言ーゝるを臆ーゝゝと仂ゝく。も朝合信親こもを聆とひとーく。心中最も愉ゝゝゞ。自方の軍援まちくゝゝーて。這遇の合戦ハ必定敗北ゝるものゝゝんと。三好仙石ゝ拳止と。憤ゝるといーども。又ゝもをゝもを張出さゞ。胸ゝ結めて磬ゝゝー。心中いゝゝゝと。亀懐まもゝゝ

西軍敗戸次川干大友侍属　信祝傑戦

食熟さゞもべ脇中損ひ。人和せざもべ辭中害あゝ。然ゝゝどゝ浦洋の大軍。もでゝ利光を攻臨ー。直地ゝ戸次の川ゝ近く。進ゝ来る先陣ハ弟地新納忠元ゝゝ。河の那方を眺ゝと覗て。故今河辺へ推来りーハ。利光の後逼ゝるべゝもど。落城ゝ囲て粒稼ゝゝと覚えゝゝ。彼敗多くハ河を渡らん。渡来らべ伏名をもて。推来る敗を悩まさん。備まさ直ゝ退ぞゝべ。自方の勢を三隊ゝ分ち。河をゝゝゝて退磬ゝー。勝相ゝゝべ甚ゝゝ乗ゞて。蟇地ゝ府内を乗取べーと。浦洋中務ゝもゝを張ゞて。弛強の名三ゝ余人名統修練の輩をゝらゝ。堤のもとゝ埋伏させ。ゝ一ゝの強名ゝ。ゝ鞆鞆の上ゝ茜深の裾きせて。白布のゝ襷させ。赤

然彼ゝる甲を召せしめ。ひとしく矣ある打物おさせ。岸辺ゝ臨て連隊を此晌大友三好。仙石川岸近く出張せしらべ。海津の軍兵口くゝ。ゝ朝喰ふを仙石権兵衛大ゝ怒りて自勢ゝ指揮ゝ。去来推渉して跑散しくきんと。進むを元就制止ゝ。らゝ私の怒を発し。兼忽ゝ渡るおとゝらゝ。今故勢の相を察るゝ。伏兵ゝて自方を勾引撃んとゝるの謀計ゝ。ゝん条ゝ渡さべ故の計策ゝ。陥んおと疑ひゝ。如らゝ隊伏を固ふゝ。故の墓るを後受て。戦らゝんゝいと言をも聞らゝ。足下の如く恐怖とていい。いらでら合戦せらるべき。縦令伏兵あるべとて。心構えして戦ゝんゝ。何の畏るゝ事らいある。四國の人ゝ

ハ闘ゝるゝ。快く渡るゝと自勢ゝ指揮ゝ。大友ゝ河の浅深を測させ。一途ゝ河へ馳投ゝり。伝祝心中大ゝ怒り。来名弥次兵衛。細川源左衛門つゝ筒ふて言ゆう。名長兵衛我弟の家ゝ生る。二十余年四國ゝ在て。父と共ゝ武勇を達そ。彼るゝ加兵ゝ平川侍ゝ。去むゝ来地を掠めらる。后ハ大渓に攻逼らるて。恥を彙りゝらるべ。潔く自殺をべきと。内府の寛仁大度ゝ逼り。妄解ゝ施命せんおとハ。先祖ゝ対ゝ父ゝ対ゝ。不孝の罪のゝ逆のあゝざめる べ。元相ゝ勧めゝ和睦せり。然るゝ此交加勢として。這地ゝ下るといふといえども。仙石三好大友侍父を挑ざるおと埃土の如ゝ。子とゝてとを思ぶべらんや。今河那

面の敵陣ゑ。謀計あるゝんゝ必定あるゝんゝ。決も烈しく戰
たんゝゑゝ。河と渡りて敵地ゑ投らゞ。自方の名士心と共
して。揮もまゝ烈しくゝん。先や仙石三好侍と。道路と轉
て推進さんと。隊整ゑしるを。文元祝うさく制止し。仙
石。三好。大友侍衆ゑ自己が切と達んと。意もゑさゞして。
河と渡して進むこと。魚鱗の網ゑ隙がおとし。忽地碎て
退返をべし。文元ゝ這地ゑ倚敵と固め。渠侍が危急と救
たんゝゑゝ。古を内府への忠勤ゝりと。教えるゑぞ信祝
も。是ゑ佐ひ文元奔一隊仙と。弟後ゑ構並名士と一騎も
動らさゞ。晌ゑ仙石秀久ゝ。大友義統が名士と斜ゑし。三
好正家と後ゑして。弦勢と懲まし戸次川と。白浪跑起て

推渡し。先隊那向の岸が上ゑ。紅拳らんとしるる時悅鴻
沸勢の陣中ゑ。一炮炮と响くやいゑや。時号と発えて尤
右の土堤の。枯芦稠る甚中より。露出ゝる三千余人。ひと
しく持ゝる弓流の。涌改そろへて一同ゑ。乱発ゝる
吉ゝ。百千の霹靂の響るが如く。面と向べき方もゑく。
瞬際ゑ大友仙石が先陣の勢。七八百人河中へ逆巻突て
撃作さる。こゝとがゝめゑ慌忙めき。右轉左倒ゑ河央より。
退返さんとをといゝども。進まんとをる三好侍が。名士
ゑ渡と遮支らゝ。同士撃の如く。逆つ返しつ轉んづ倒ゝ
つ。躊くの態ありゝゝべ。仙石三好も初の僑言ゑ似もや
らぜ。一止もゑく孔退ゝ。釆納忠元こゝと。奔て甚ゝや渡

上方の先陣
大友仙石三好の
軍勢戸次川と
渉つゝ島津勢の
謀計ゑ陷る

セといふより蚤く。新納武蔵守が三子余騎河の中央を正一門地ふ推渡セバ。右方より八伊集院忠棟同じく三子の騎兵を紐て。飯と流セバ右方の岩より。清津中務太夫家久弟兵四子有余人山も崩るゝ猛威を振ひ。弓得ふあゝき河の端も一流流さぬ相と示し。吐と嗔て推渉り一地ふ東岸へ攀踏り。騎兵歩卒の嫌ひふく。捲起る見相ハ。鯨鯨の巨海ふ吹ぐ如く一すぢ分塩り得ぢ。退起こゝ攻逼ゝり。去ぢ乗さめふ大友侍が。家の股肱の名を得し勇士。戸次右近丈家方とそじめとして。去ぢが一族刑部結時。同じく治部ふ捕結直同隼人統正。由布又右清つ雑井右清つ佐。久保孫右清つ。足立兵庫助侍。所と擒ぢ戦

死しゝり。這陣ふ大友義統ハ。命とのそと敗走して。虎ハと逃ぢ踏逃ゝり。這時長岩我弘元親父子ハ。隊伍と番後ふ立並べ。兎や自方の敗北せんかと一瞬下ふんぬべし。と。彩る陣ふ在るもあゝバ去そ。朝風ふ散る花吉のおとく。一歩も恬らぢ逃退くと。元親ハ病て然とそ。ゝめ。新の如く孤ぢゝる。自方と急ふ敗ちんとセバ。却て共ふ振倒さぢん快一條の道を開き。自方の名を行ぢし。敵兵来ら バ横陣より。整て出て戦ふべしと。伝祝ふも指揮を伝え。隊伍紙とセゝぢゝると。彩納武蔵守蚤くも病てとり。三方の勢三万余騎と。二隊ふ分ちけて父子余騎とバ。大友三好侍が跡と逐ぢセ。残る父子の勇士と孤て。長岩我弘ぐ

陣に突て蒐る。これによつて元親信親。余所の自方を顧
み助ること能はず。新納が敵に撲り合。父元親ハ信親を。
救はんと揉乱せバ。信親ハまた父を助け。火水になつて
戦ひけるに。新納が先隊信親元親に衝乱して。即地
に血河髑丘となし。死亡せる軍数を知らず。然れども島津
ハ大軍なれバ交代りて攻寄ること単騎急なり。弥三郎
信親これを見て。父にハ先に敗走しける。自方の敵を殺
さセしめえ。乃子ハ此敵を喰止て防戦すべしと稟命て。
信親ハ二千余人の勇兵を従え。新納が敵に突て蒐る。土
佐守元親ハ。先に進める島津の先陣中務が敵の後より。
無二無三に撃て蒐り奮激突戦したるほどに。仙石。三好

大友等辛くも助命し落延けり。偖も信親主従ハ戸次川
の東なる。中津呂川原といふ所に敵を受て返つ捲りつ。
敵兵と突崩せること十三度。二千の兵も大半撃れ。隊伍
も疎漏になるといへども。信親些も屈撓せず。猶も進ん
で戦はんとせし時に。土佐家第二の忠臣桑名弥次兵衛親
俊。兼て信親が覚悟せし。品縁の末といひ今ぞ浩る戦相
必定戦死せらるゝ事と。はやくも察して諫めけるやう。
自方ハすでに撃減されし小勢のところハ若武者の。大敵
に対して勝がたかるべし。此所を退去たまひ。父君を
ひとつになり然して決戦したまふべしと。聞て信親莞爾
と笑ひ。実に理ある諫なれども。其ハ尋常のことなんめり。

吾倅父子荀も内府の命と称りて。鳴津の大敵と拒げんさめ。西国の地ふ発向しあがら。這所と退きて。敵軍の名と受るあるべ。何面目ふ再び内府へ謁ゆべきもつとも今度の敵軍ハ。仙石三好が体忽より。発りつるゆふハあるとど。西国ふ絶まで名と振らしる。長曽我部父子の者が。遠く九州の地ふ来り。鳴津と絆と交るふ臨ゆて。唯一戦ふ敵と取り。逃退きしといとれまば。吾ハ奈もあるとも家国の恥あり。縦令ハ退きて。利と得るの術あるとも。一旦の汚名言ぐふ返ふし。古ふ因て至後一致し。敵と何遠も逗撫り。勇猛の色と弱ふし。然して后ふ戦死セバ。大張西国の長曽我部ハ。武勇の名家ありとと。

故と怖さしむるものあら。後の軍の為ともありて長曽我部の名ありと聆ふるべ。自然と怖ふ来むるものあり。最初ふ父と別ふしも。吾倅一人踏止り。戦死ゆべふ覚敵ふ見ハ。暫ひ躊むるあとふ時と知て死ゆるハ吾の逗ふして甚胸と失ひ命と延るハ。未代までの恥辱あるぞと。吾死と況ゆて桑名とゆじめ。細川江村。久武あんど。泪と流して感彼ふし。御弱年ふ坐しまセども。大張あるる御懐意。勇士ハ斬ふ乃ゆ乃士輩とて。寸歩も跡へハ退くまじ。弁しく三途の河俱して。三世の約と失ふべうらむ。嗚歓ゆしや嬉しやと。死と甘んぜる勇士倅が。忠義の程こそ恃もしゆ中ふも桑名弥二

名清。老人の役なる所ハ冥途の先陣こそ名ゐ主と。正一門地ゐ紅出をを信親輩くとうち笑ひ練めー桑名ゐ出抜き出ぞ。夫後るゝ赤縫ゐや縫ゐと。信秋暮地ゐ地出せば。寄らーものと細川源左衛門義助南園左衛つ左夫。石谷名弘元園氏弘亮秋衰九名清。吉田次郎左衛つ。國右三郎名清。壁中三郎左衛つ。窪源河守將舍九郎名清侍一騎當千ゐ三百計のゐ勢ゐて。鳴清勢の大軍へ。面る舶らぞ撃て蒐き出ば。納ゞ先陣平田新右清つ。大聖橋左清つ。一ゐ余清ゐて棄名陣次名清と捨拒囲ゝ。突発淪へ秋の聖ゐ枯くる芋苑の風動ゞおとく。夫氏と振えて突蒐ると赤十後ゐ左三右ゐ。太刀ゐ斬ると幸ひゐ斬紀くく薙巴り。弔地故と撃拒るおと。九七人ありー。甚身も数ヶ所の痕と蒙り。新納ゞ勇臣四郎左近右清つと撃合。刺奮てぞ死ぶりる。逝年六十有八歳。古今未名有の猛壮軍漢蜀の黄忠といふとも。寄らざりる奮動ゐ古ぞ。古きゐ縫て四國の勇士。ゐ出を出よ棄名ゞ如き老軍ぞゝ賜の故と撃拒ゐる。壮年卯ともつて戦ひ寄らば。生和死後の孤ゐるぞ桑名ゐ寄るゐ後るゝゐと。逆ゐ懸ゝ励まさ出。憤然として斬て廻る。能中伝説ハ亨年二十有二才。猛気奮烈ゝる大将ゐ出ば。もつとも正斜ゐ馬と近ませ面名まを背名まを。清ゝゝる武者も責卒る。棚故斬故薙る故花来る矢殃も

一斉に拂ふかどに斬かゝる。おの刀も双手にて鉞の如く。血熱に練て撓き乍ら。亀筋に持せし白様の長刀搖揺舒。雑卒の雲霞を巻ぐ如く。凜々として薙起るべし。了得に勇猛の羅宇勢も。忽死の勇将に斬起られ。平田新右衛門。大野橿左衛門も。踏止るおとなりぐ〳〵。岩蔭より。新納後陣伊勢名弟大炊助佐渡守九郎右衛門尉昌一子余勝に南河原を推出し。横隊より近紀れるゝぞ。信祝二方に敵と並對接紀らるゝといふといへども。岩も屈せざる左右に別れ。頼く靂くとして戦ひ乍ら。伊勢の隊名足田名三生石義八左右方より。信祝に撃て蔓るを。頼茱萸の拳動ゝ。令冥加に信祝ぐ。刀に掛て得させんぞと。劈甲より割られべ。足田に撓も繼の胴も微塵にせらるゝて死ぬ。ゝ〳〵。生石義八郎消だゝり。馬を返して逃行を後相に薙蹴を猛憤さるゝ大疾刃のおとく暴に虐てぞ血戦去る。

新納振勇撃捉四國佐將　属　信祝戦死

太宗奠ゞて張總管と勇去る。何に忠を以て國に報ゆるものハ。身と顧ざるとハ。後に信親ぐ。齒塲の合戦に衍佛より。然るどに弥三郎巻の信親ハ。死と決し〳〵る猛奮の。祝頭殊に結ゝ乍べ。汚涙勢の隊く仏く。を古し蹂踏て来えゝるに。後隊にあつて。佐軍に指揮あ〳〵在ゝるゝ。自方の先隊信祝ぐ。さめに近頼さる。

退くと雖て大ゐ怒り。浩るゐ勢の四國猿ゐ斬掘まさを
て名章を失ひゐる古そ憾懐ゐを。退く自名い軍令をも
て。ひとつゝゐ首を刎ん。名ゐ絶ろと大号ゐ。て熟し
丈余の鉄材柱を。ゐ振くく獅子憤瞋の猛威を張し。百二
三十羅立る。長弟我弟ゐ孫中へ。旋風起て打て投ゐを
ゐさめゐ四國の強章棒ゐ棒後ゐ古七人。微塵とゐつて
血例を。然ども必死の勇士猛章咲も怖を弥納を目的。
正さきゐ棚蒐るい。厄園民弟亮孫尖怒ちセ忠元ゐ。梶を
改去棚んとをるを。弥納虚勃さを孫一斉ゐ。斜檀とうと
セて撃例セバ。咲も振ら怒を厄園民部馬人共ゐ盧紅ゐ鮒
も体ゐて死失る。國右三弟名清ゐを。るよう。咲も

振えを紅来り。憤然として武蓋守ゐ。左をより斬て蒐る。
弥納いゐを近づけまゐと。激電の如く撃掛ふと。剽姚
の三弟名清。鉄梶の下を搖寶り。右方へ繞て武蓋守ゐ。発
を。の辺を二刀まで。斬名ろといふとい〳〵ども。弥納ゐ猛
い名と得る。海荒丸の三重襲を。ゐ。も鉄の蹠ざりろ
ると。國右いとゐ朽憾しく。虚隙を刺んと槊らふうち。忠
元怒つて梶を振あげ。滅多撃ゐ丸ゐ。三弟名清
ゐ騎る馬の首を泥の如くゐ砕ゐ。脳髄まを。て仆
を。ゐ。も。吉鞍ゐ持を。大地へ擡と墜るとゐろと。
忠元梶を逆ゐ取て。下突ゐセ。ゐどゐ。三弟名清紀もあ
ゐらを。赤ゐ染てぞ死ゐ。ゐ。る。是ゐも怖を。壁中三弟

新納忠元猛
勇を振ふ
長曽我部の
強兵を微塵
に打却き

左衆つ窪後河守。二騎ね並び。馬を跳らせ紅来り。新納を
狭で左右より。撃て蒐るゐ武蔵守もの〳〵やと二個
を引結。正面ゐおつて戦ふこと。稍片時をるゝ。了得
の堅中三弟左清つ。新納ゞ捧を舎釈ゞさく。怯むと得と
りと武蔵守ゞ。陳捧揮揚大喝一叫。微塵ゐおもと拗出も
べ。憐むべし三弟左衆つ。馬人共ゐ血烟の腥風間ゐ裂殺
去りり。後河守ハ主隙と付入。新納ゞ膝口斬出るゐぞ。極
猛云抜の忠元も。梶とおぐるゐ怯ゞさく。巨撃を排ゞて
後河守と撃搏で言く星扮。それ撃捉と辭さる。自分の中
え抛出もべ。新納ゞ老黨跑進て。後河守と撃捉さり。蔵ゐ
細川源左衆つハ。伝祝と助りて戦ひ在りるゞ。新納ゞ猛

戦と心ゐ聴り。渠一人と撃捉べ。余ハ怖るゝゐ足まゞと。
爆行の如く叫紀。新納ゞ胸下ゐ電突も忠元梶と採る隙
もおりもべ。大左刀割て揖り合。一瞬半面虚と表セざゝ
ゐ万ゐ挑むといえども。遍ゐ名誉の勇将おもべ。勝敗の
相表えざりるゞ。細川焦燥て突発突ゐ死の怒野烈
しりもべ。新納漸く疲生じて。舎釈ゞさふ表えりる所え。
伊勢会幼貞昌横隙より紅来り。源左衆つと馬殺と棚突
もおゞら馬絶遠え。伊勢貞昌ゐ揖合と忠元をらさゞ一
ゐ刀吹る。細川今ハ強法条も逐ゐ戦死衆りる。武蔵
守忠元も。其身おおひゐ疲労りもべ。隊他と退て休足も。
此時弥三弟信祝ハ主従もづりゐ三十余人ゐ撃喊まさ

を各淚痛と彼るといえども。遁を退く心ふりをむ勇氣
まを〳〵奮発して。踏込〳〵く戦ふ相ハ。忠を弥ふ〳〵義と
重んじ。身命をもて風塵の如く輕ふすを。誠ふ信祝が股
肱股心の老臣とおそ知をさを。近辨先を扼がんと。鴻津
の勇将種治大膳亮の一子余人の猛名を率て百重ふ伝
親を推捉囲を。剰をまじと接る。四國の強勇士南國久
武秋爽江村右田。石谷主を清獲て子面ふ撰り。翻波軒冬
の術を呈し。怒潮の如く近く敵を逐逐〳〵く。三十八度戦
ひ〳〵が甚猛勢の烈〳〵を。種が鴻の勇軍仆戦俤
で稍ふ霧時。進をもやらぞ休息を。時ふ右田次郎左衛門
伝祝ふ自害を勧め〳〵ると。弥三郎聆て冷笑ひ大将戦場

ふ自殺をるい弓折矢嶽の尽をる時運極て做おとあり。
家名を穢さぶるとめふ烈死せんとをるものが。何ぞ徒
ふ自害を做べき。十一分の戦ひふし。良敵あらべ刺違て。
死んおとおを本望ふをと勇氣凛〳〵〳〵ふぞ。法勇
士をを〳〵感佩ふし。近一云ふ心を懲まし。荐び噢て敵
中え。安縦安横ふ猛投て。おもひ〳〵ふ良敵を撰撃ふふ
し〳〵ふが。今ぞ最期の涯ふ。猛威をじめふ百倍
おて。太刀折塗の尖頭も碎け。猛人獣ふ對敵をえをまぞ。
其身も敵の如くふ〳〵ふ〳〵て。右鞆左仆ふ戦死し。今ハ信祝
ふ隨ふ輩。猛倉九郎名清南國左衛門太丈江村掃部助勉
谷伊豆守福留隼人の又人のをあり。然ども信祝をこし

も圧せざる疲さる相もふく。棟の砕くくる薙刀抱奔。鎧の上帯緘整し。二尺七寸左文字の太刀はいと先年伝来せる。と擘面ハ畜聲し。雲霞の如き敵中へ。大地を震ひ弦投る。伝祝嘉日の威雅い。金の日輪ハ銀の立波の面標ハ。たゝ頭像の兜。緋糸と浅葱の糸をもて。水火ハ縅せし大鎧。速瓶といふ大槍ハ。太白須を右後ハ被しゞ。馬も澄も。雪縅も。敵の血ともて盧紅ハ浸しくり。然ども其身ハ之づゝハ淡庫。二口所負くるのミなるべ。雷喝百声連嗔し。て。万面ハ撲り戰ひくるゞ。眈と那方を見て行べ。英くし き鎧被る大将の。独奔ハ指揮して在りるもえ。渠こそ大張勇士なくんと。祖と弦入り大喜揚てなるハ。日國ハ

人と長くる。長男我弟土佐守元親ゞ嫡男。弥三郎拳の信親亨年二十有余歳。今此場ハ戰死せんと欲をなるべ。然ざくり。敵い嫌ふまじ。汝や宜くらん快出よと。号発て向ふくり。浩と聆くり那方隊将。愉快ハうち笑ひ。宜くも号らせ。ふものゝかな。我ハそハ九郎ハ。云双の勇名と達しくる。種治の父頭右京亮光重ゞ長男種治大膳亮明ゆ。対敵ハ足ざるおともあるまじ。先推参と。約紅出をと。老堂治田左弟八郎馬寧退て。斬ハ仇あき清拳動あり。義ハ乃士ハ壊らせ。えと。太刀振廻して信親ハ。斬て薙るを近附もせず。一刀の下ハ吹て落し。隙際も。見せず大膳ハ。吹て薙ると種治眼前ハ家臣と。ぶくくハちつとも

べつぎん
戸次川の
軍敗をく
弥三郎信
親自方の
義勇と損
さぐらんが為
ふ潔く打死を

粧飾をなすべき。おのおのじく太刀ふて斬結び。逐つ返しつ両
合出没雲の如く翻えり。風のおとく疾く通る。その疾きこ
と後岩の岩間と聞く電光の像し。他交もせず一百餘合。
震天動地戦ふこうり。然るに秦の信祝は。今朝より数度の
合戦ふ。馬は勿論騎主も大ふ労疲果てこうしこうども。今日
と敵の戦場をなべ。粧も屈せず激戦せしこうべ。いよ〳〵
手刀の手方変て。大腦あやふく見えしこうべ。岩の陰後
志村喜右衛門亨年七十又才の。初陣なりしが跡と跑進
て。信祝が股の辺を志〳〵こうふ斬落るふ。信祝いこうつて
志村喜右と。一刀下ふ砕墜せ。その際ふ大腦馬跑進せ。暁
と織で撃拝ぶり。弥三郎も刀を抛ちて。ともふ拝合揉落

つ。去馬の際ふ落重なり。特く及震ふしこうるが。信親身体
疲るこうへふ。痛と蒙りこうるふより。逐ふ大腦ふ撃迫し
は。現ふ惜むべき名士なり。種時豊四は首搭刎て紀誉り。
大音声ふ長労我敵弥三郎信親と。種時大腦が撃捉こうり
と。咲たるお元を聆こうりも姫舎江村南図然容福冥又人
の猛勇士。これも〳〵と戦死志こうり。今日戸次の川原ふ
おひて。戦死しこうる長労我敵が勇士又十壱人雑兵四百
余人なり。時津勢ふ戦死しこうる兵士雑卒一千八百有餘
人。おもをお伝祝主従が。憤戦の手ふ撃迫こうる兵卒なり。
開も時津勢國と出てより従来今日の如き大合戦なこう
ざりしをば。猪利は得るといふといえども。法士雑卒多

く損ふ一得九損の軍ありと。新納をもじめ種々侍伝祝
主従の挿搭を感じ。肝膽を冷してぞ彈伐えぬ

繪本豊臣勲功記九編巻之三了